

②岩美郡の取り組み

研究主題

「いきいき わくわく みんなで取り組む 岩美っ子」

～ 主体的に学び 豊かなかかわりのある体育学習 ～

1 研究主題及び研究について

平成31年度及び令和元年度の岩美郡小学校体育部研究会は、新元号「令和」の幕開けに続き、5月8日に活動を始めた。第1回部会では研究テーマについて検討、事業計画の確認、役員決定を行った。5月8日の段階では、研究主題及びサブテーマについての変更はなく活動を開始している。

第2回部会では岩美郡の「児童の実態」及び「体育科の現状」について話し合い、整理する中で研究主題サブテーマの変更についての議論が行われた。岩美郡の研究主題サブテーマは平成28年度より、「仲間との豊かなかかわりを通して運動する楽しさを実感できる体育学習」として研究を進めてきた。本年度は、新指導要領で言及されている「主体的・対話的で深い学び」を意識したことに加え、これまでの研究で培ってきた「豊かなかかわり」を踏襲したサブテーマである「主体的に学び 豊かなかかわりのある体育学習」と設定した。

12月17日の授業研究会では、課題別の練習場所の設置をすることで児童自身が課題について考え、練習方法を選択する姿が見られた。また、タブレット端末（iPad）を活用し、友達同士で動きを確認しながらアドバイスを送り合う児童の姿も見られた。はじめはできなかった技が、授業の中でできるようになった児童も多く見られた。達成感とその喜びを味わうことだけでなく、友達と協力、共感する姿が見られ、今年度のサブテーマに迫る授業であったように感じた。

本年度の授業研究会で得た成果及び課題について今後も詳しく考えていく必要がある。また、器械運動領域のみでなく、他領域での活用も視野に入れ、研究を進めていきたい。

岩美郡小体研として今後も様々な取り組みを行うことで、体育学習の新たな可能性を探っていききたい。

2 具体的な取り組み

5月 8日（水）	第1回部会 研究テーマ・事業計画・役員決定
7月26日（金）	第2回部会 研究テーマの再検討・授業研究発表者の決定
12月 6日（金）	第3階部会 授業研究会事前検討
12月17日（火）	岩美郡小学校体育部研授業研究会
	第6学年 器械運動（マット運動）
	「目指せ！！技マスター」
	授業者 岩美町立岩美北小学校
	山本 純也
	永見 幸久
	指導助言 岩美町立岩美西小学校校長
	谷口 謙

実践事例①【「わたしたちの体育」を活用した実践】

「目指せ！！技マスター（マット運動）」の実践を通して

岩美町立岩美北小学校 山本 純也 永見 幸久

1 はじめに

本研究会では、〈研究テーマ〉「いきいき わくわく みんなで取り組む 岩美っ子」をテーマに研究を進めている。また、「主体的に学び 豊かなかかわりのある体育学習」をサブテーマとし、主体的に学習に取り組む姿と、学習の中で児童が活発にかかわり合う姿に重点を置いて取り組んでいるところである。

本年度の器械運動（マット運動）では、以下のような場面を課題として実践に取り組んだ。

- ・児童がマット運動を行う必要感を持っておらず、主体的に学びに向かおうとする姿が見られない。
- ・痛みへの不安感や技への恐怖心をもっている児童がいる。それらにより意欲を高く保つことができない。
- ・実際に自分の体の動きを目で確認することができず、技能の高まりを児童が実感することができない。
- ・仲間とうまく関わって学習を進めることが難しい。

以上の課題について、（１）学習内容の明確化、（２）場の設定の工夫及び教具の使い方の理解と工夫をすることで、主体的に学習に取り組む姿と、豊かなかかわりを創り出すことができるのではないかと考えた。それらの視点に加えて、体育科準教科書（３）「わたしたちの体育」の活用も踏まえて取り組んだ「補助倒立前転・倒立前転」の授業実践事例を紹介していきたい。

2 研究の実際

（１）学習内容の明確化

器械運動領域におけるマット運動・跳び箱運動・鉄棒運動は、日常の中で頻繁に使用する動きではないため、他領域よりも生涯スポーツに直結しにくいものであると考える。そこで第１時には、児童がマット運動を行う必要感を持つためのオリエンテーションを行った。学習の流れや学習の進め方を伝えるとともに、マット運動を行うことの良さについても考えさせた。また、授業の中では、本時の流れをホワイトボードで示し、見える化することで児童が目標を明確に持ちながら活動ができるようにした。

単元計画

時	1	2	3・4	5	6	☆本時7	8	9
主 な ね ら い	自己の課題を発見する。 学習の進め方を知る。	基本的な技が安定してできる。	基本的な技の質を向上し、発展的な技への見通しを持つ。	発展技に挑戦し、自身の能力に適した技を見つける。	技のポイントを整理し、他者に伝える。 発展的な技を安定して行うことができる。	技のポイントを整理し、他者に伝える。 発展的な技を安定して行うことができる。	自己の適正に合わせて、組み合わせた技の発表を行う。	自己の適正に合わせて、組み合わせた技の発表を行う。
学 習 内 容	・学習のルールや進め方の確認 ・器具の準備方法や安全の確認	・基本的な技の練習をする	・基本的な技の確認・練習 ・発展技の導入	・発展技の確認・練習	・発展技の確認・練習 ・ポイントの学び合い	・発展技の確認・練習 ・ポイントの学び合い	・技の組み合わせ ・発表練習	・組み合わせた技の発表
学 習 活 動	・目標設定 ・オリエンテーション	・後転 ・前転 ・開脚前転 ・開脚後転 ・振り返り	・後転 ・前転 ・開脚前転 ・開脚後転 ・振り返り	・側方倒立回転 ・伸膝後転 ・倒立前転 ・振り返り	・側方倒立回転 ・伸膝後転 ・振り返り	・倒立前転 ・振り返り	・組み合わせを考える。 ・発表練習 ・振り返り	・組み合わせ技発表会 ・振り返り
評 価 の 計 画	知	○	○	○	○	○		○
	思				○	○	○	
	主	○	○	○				

(2)場の設定の工夫及び教具の使い方の理解と工夫

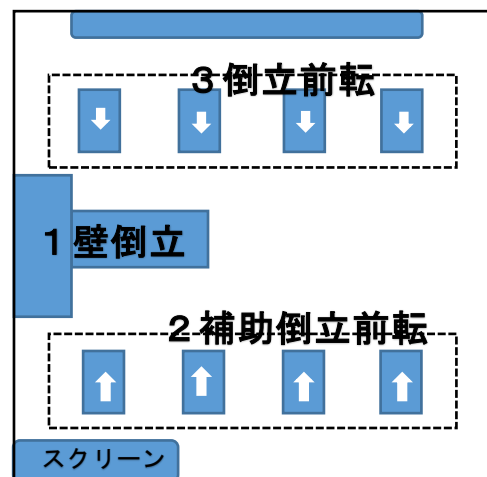
①グループ編成の工夫

児童間のかかわりを生むために、意図的に4人1組のグループを作成した。事前に集計したアンケート結果及び運動能力を考慮し、能力面でばらつきのあるグループ編成をしている。ウォーミングアップや本運動につながる動きを楽しみながら共にする中で、アドバイスや話し合いが生まれることをねらった。

②課題に応じた場の設定

体育学習の中では、個々の児童に運動経験の差があり、技能面で開きがあるため、技の習得段階に応じた練習場所を3つ設けた。各練習場所のめあてを確認した後に、児童に練習場所を選択させた。

- 1：壁倒立マスターコース
- 2：補助倒立前転マスターコース
- 3：倒立前転マスターコース



体育館での場の設定図

③タブレット端末（iPad）の効果的な活用

マット運動の学習の中で、友達の動きを目で見て確認することはできるが、自分自身の体の動きについて認識することは難しい。そこで岩美町の各学校に配布されているタブレット端末（iPad）の活用をすることとした。児童の動きを動画で撮影し、再生することで自分自身の体の動きを視覚的に捉えることができるようにした。また、自分の動きのみでなく、友達の動きについてもグループで確認し、児童相互で話し合いをする時間を設けた。スクリーンも設置し、全体で児童の動きを確認する時間も設定した。



撮影した動きについて話し合う様子



動画を全体で共有する様子

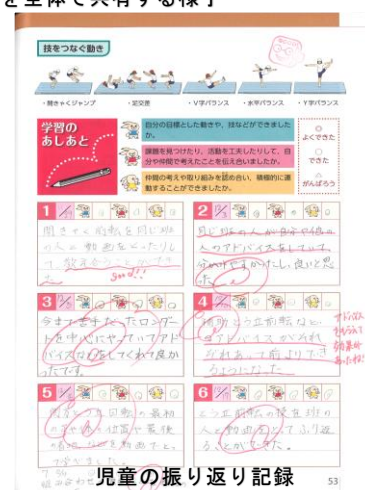
(3)「わたしたちの体育」の活用

①振り返りの記録

学習での反省や学びを「わたしたちの体育」の振り返り欄に毎時間記録した。

②モデルとしての活用

授業の中で、動きのポイントや技のコツを確認する際に、イラストで確認した。児童が試技を行うマットの付近に「わたしたちの体育」を配置し、常時、準教科書を確認できる環境の設定も行った。また、体育館の壁に「わたしたちの体育」に掲載されているイラスト画像の拡大図を掲示した。



3 研究の成果と課題

(1) 成果

①学習内容の明確化について

単元オリエンテーションで学習の流れや進め方を児童に明確に示すことで、学習のイメージが児童の中に生まれ、単元を通してスムーズに学習を進めることができた。また、オリエンテーションの中でマット運動は普段行わない運動であるからこそ、体育学習の中で学習する意味があるのだと知り、運動感覚を豊かにするという必要感を持って学習に取り組む姿を生むことができた。

②場の設定及び教具の使い方の理解と工夫について

倒立前転の学習では、児童の技の習得段階に応じて3つの練習場所を設けて展開したことで、児童が自己の能力に適した課題の解決の仕方を工夫することができた。また、同じ課題を持つ児童同士がグループをつくることで、苦手意識を共有しながら積極的に技に挑戦し、技のコツやポイントを考えようとする姿が見られた。

③タブレット端末（iPad）の効果的な活用について

iPadを使い児童の動きを撮影したことで、自分や友達の瞬間的な動作を見逃すことなく、詳細な見取りを可能とすることができた。自分の動きを繰り返し見ることや、動画を停止してポイントの確認をすることで、自分や友達の動きの課題を見つけることができるという面や、意欲の向上という面でも効果があった。また、児童同士のかかわりの面でも効果があった。撮影した動画をグループごとで確認する時間では、運動の苦手だった児童と、得意な児童が一つの場所に集まりながら「足をピンと伸ばすともっときれいになるよ。」や「目線が上がっていないから、手を見るようにすれば目線もあがるよ。」と積極的に動きを分析しながら相互にアドバイスを送る姿が見られた。

④わたしたちの体育の活用について

「わたしたちの体育」に学習の記録として振り返りを記録したことで、児童の技能がどのように変化していったのかを児童自身が捉えやすくなった。感じたことや考えたことを言語化して表現する活動でもあり、思考・判断・表現力を養うという面でも効果があった。また、記録を残すことで評価材料として活用することもできた。さらに、イラスト画像から動作のポイントや練習の方法についてのイメージを共有できるという点でも「わたしたちの体育」は有効であった。今後の研究においても、有効に活用できる場面を模索していきたい。

(2) 課題

①ICT機器の活用方法について

児童の瞬間的な動作を低速再生や停止して観察することができるという点においては非常に有効な道具ではあるが、そこに固執するのではなく、児童の「生の動き」も大切にする必要があったように感じた。また、本研究授業では児童がiPadを駆使し、動画撮影を行う場面が多く見られたが、授業者の意図や児童の技に対して持つ課題によって撮影する場所や角度を徹底して考える必要があると協議の中で意見が出た。単なる「活用」ではなく、「効果的な活用」を問い直し、今後の研究を進めていきたい。

②豊かなかかわりについて

本授業では、それぞれの児童が課題を持って、その課題を克服するために練習方法を選択するという場面があった。その中で、児童がどれだけ課題を意識して活動に取り組めていたかについて考え直す必要がある。児童のそれぞれの課題意識を言語化することや見える化することでより明確な目標を児童がもつことができたであろう。iPadで撮影した動画を見ながら児童同士がアドバイスを伝える場面においても、相手の課題を把握せずにアドバイスをすると課題意識と助言内容にズレが生じてくる。児童の課題を共有し、学びを深めていくための手立てを講じることで「豊かなかかわり」は生まれてくるはずである。今後の研究でも、「豊かなかかわり」を追求していきたい。